かすかな発信を読み取る

障害の重い子ども・仲間たちとの関係づくりで大切にしたいこと

白梅学園大学　高木 尚

Kさんの応答

初めに自分の実践から思い返してみたいと思います。重心施設の分教室に勤務していた時代のことです。Kさんは小1の女の子。無酸素性脳症後遺症・てんかんの診断でした。気管切開をしており、経鼻経管栄養（摂食練習中）と吸引が必要でした。体幹をねじるような強い緊張が入り、上肢は伸展位が多く反射的な屈曲動作が見られることもありました。視覚障害の診断がありましたが聴覚は良好で、歌遊び、絵本読みが好きでした。呼びかけに口をモグモグと動かすこともみられました。入学後一定期間が過ぎると、「口の動き」はKさんの「応答」ととらえても良いのではないかということで以下のような検討を行ないました。

「Kさんの口の動きは応答である」とすれば、

(1)意識的である（寝ている時には出ない。摂食練習中の口の動きが、好きなものにはよく動き、嫌いなものには動かないという意識的なもの）。

(2)働きかけが作用している（授業後、働きかけがほとんど無い状況で1時間ビデオ撮影を行なったところ、寝ていると観察された時間には口の動きがなく、その他の時間帯でも働きかけがない場合には口の動きがほとんどありませんでした）。

(3)一生懸命受けとめようとしている時には口の動きが減り、余裕が出てきたら増える（新しくとりくみ始めた「歌」や「絵本」では、とりくみ初めには口の動きはほとんどなく、6～7回頃から口の動きが頻繁に出始めていることが確認できました）。

以上の検討の結果、「Kさんの口の動きは働きかけに対する応答である」ととらえることができると考えられました。この検討結果が明らかになる前からそのようにしていたのですが、Kさんとの関わりにおいては、「問いかけ→口の動きを待つ→意思表示に応える」というスタイルをより確信をもって進めるようにしました。大好きな歌遊びの場面。1回終わるとKさんは口をモグモグと動かして応えてくれます。そこで「よかったねー、もう一回やる?」と問いかけ、口の動きを待ちます。「モグモグ」と答えてくれたら「OK、じゃあもう一回ね」ともう一回行ないます。そしてまた、「モグモグ」「もう一回やる?」「モグモグ」「OK!」…5～6回行なうと、「もう一回やる?」の問いかけに「……」との「返事」。満足した様子です。そこで、次のとりくみに移ります。

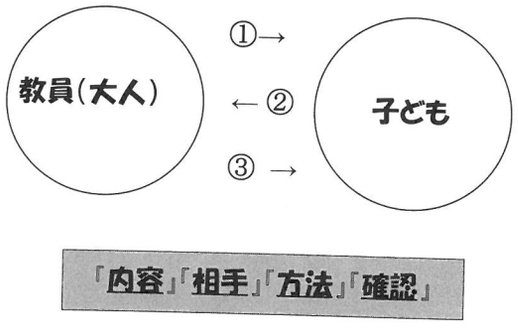
コミュニケーション関係の一般的図式

コミュニケーションはやりとりといわれていますが、関係性が非常に大事になります。一般的図式として下の図のように考えています。

やりとりですから相手のあることです。伝えることを意図した場合は「伝える内容」があり、「伝える相手」があり、「伝える方法」があります。そして、当然のように「伝わったことの相互確認」が必要です。「内容」「相手」「方法」「確認」が大事と押さえられます。

図でいうと、①の私たちのアクション、②の子どもたちからのリアクション、そして③の「あなたのリアクションを受けとめましたよ」という返し、が大切になります（子どもたちから先に発信してくる場合もあるでしょうし、③の次に④⑤…と進んでいくことも多いでしょう）。

コミュニケーションの関係の一般的図式



①の私たちのアクションを子どもたちに受けとめやすいように工夫することはいつもなされていることと思います。では、②の子どもたちのリアクションを私たちが受けとめることについてはどうでしょうか。重い障害のある子どもたちは「反応がない」「つかめない」とよくいわれています。しかし、子どもたちができるところで発信しているという事実が多くの実践の中で確認されてきました。

伝わったことの確認が大切

図の③の「あなたのリアクションを受けとめましたよ」という返しは大変重要と考えています。子どもたちは②のリアクション（発信）の重要性を解っていくからです。そのことによって次のようなことが考えられます。

「伝わったことがしっかり確認できるコミュニケーション関係」の中で、